

明治末期の実業補習学校修身科教科書・勅語読本における 「戦争」「博愛」等に関する記述内容の検討

土 屋 直 人*

はじめに

戦前日本の実業補習学校は、1890（明治23）年の小学校令、1893（明治26）年の実業補習学校規程の公布により法令上設置が規定された。1902（明治35）年には改定実業補習学校規程が公布され、各地方の事情により自由な学校（施設）経営が許されるものとされていた⁽¹⁾。尋常小学校を卒業し、一家の二・三男として農業・漁業従事者あるいは低廉労働者として農山漁村共同体に居残る勤労青少年への教育機関として存立した、言わば「傍系」にあったこの「袋小路」の実業補習学校は、日露戦後の明治末期になると内務省主導の地方改良運動や、「戊申詔書」（1908・明治41年）の聖旨奉戴運動などの諸施策に伴い、全国各地で設立されてゆき、次第にその数を急速に増やしていった。大阪府天王寺師範学校長・村田宇一郎らの「自治民育」の構想・実践が発表されたのもその頃である⁽²⁾。

日露戦争後の時期、果たしてこの実業補習学校の修身科では、いかなる国際関係観、戦時国際法観、そして戦争観、博愛観が培われんと考えられていたのでしょうか。本稿は、前稿⁽³⁾に引き続き、明治後期～大正初期、実業補習学校の修身科において使用されるために刊行されていた教科書、及び「勅語読本」と称されていた各種読本の中の戦時国際法、戦争、博愛等に関する記述内容の特質を検討しようとするものである⁽⁴⁾。

実業補習学校用の修身科教科書は、日露戦後の明治30年代末頃から発行されるようになる。そして明治末期の戊申詔書煥発の後から、尋常小学校の補習（科）用や実業補習学校修身科用として、「勅語読本」が発行されるようになる。両者の発行された冊数は、管見の限りでは決して多いといえるものではなく⁽⁵⁾、また戦争や国際法、人道や博愛に関する記述が見られた教科書はその一部であったが（末尾【附表1】【附表2】を参照されたい）、ここではそれらの数少ない記述内容に着目することにしたい。

明治末～大正初期の実業補習学校の前期課程において位置付けられることとされていた修身科に関しては、中等学校の教授要目のような公的な教授内容の規定は存在せず、そこで教授すべきとされる徳目内容や細目は、文部省令等には明示されていなかった。したがって、大正末期の実業補習学校での公民科特設以前、この実業補習学校の修身科では、外交・国際法や戦争、博愛等について何が教えられようとしていたのかを確認するためには、先ず以て、そこで使用されるために作成されていた実業補習学校用修身科教科書や、修身科等の補習用に発行されていた勅語読本などの各種読本の記述内容そのものを検討する必要がある⁽⁶⁾。

* 岩手大学教育学部社会科教育研究室

以下、時代を追うかたちで、実業補習学校修身科用の教科書、勅語読本における、国際法や戦争、人道などに関する内容構成や具体的な記述内容を吟味してみたい。

1. 明治後期の実業補習学校修身科教科書における記述

まず、日露戦後の時期に、実業補習学校用として刊行されていた教科書の記述を検討してみよう。

(1) 村上辰午郎『農業補習学校用修身教科書』(明治37年)

日露戦争勃発直後に発行された、村上辰午郎『農業補習学校用修身教科書 下編』(実業教科研究組合, 1904・明治37年)の「八 博愛」には、次の記述がある。

「戦争は、兵力をもって、敵の兵力を、そぐを目的とし、決して、怨をもって、敵の一人に対するものにあらざれば、傷病者は、敵身方の別なく、これを、一様に、取り扱はざるべからず。これ、博愛の主意にかなふものにて、赤十字社は、全く、この趣意よりて、出来たるものなり。」(18頁)

ここでは、戦争の目的を説明する中で、戦争は「怨をもって、敵の一人に対する」ものではないと戒め、傷病者の平等・公平な取り扱いが「博愛」に適うものと説いて「赤十字社」を挙げている。ここにはルソー流の人道思想の影響が見られる⁽⁷⁾。

続いて同課では、クリミア戦争でのナイチンゲールの活躍を説明し、また仏墾戦争での「デュナン」⁽⁸⁾の活動を挙げて「これ、赤十字社の始めなり」と述べている。

(2) 長谷部愛治『実業補習修身書』(明治38年)

また、長谷部愛治『実業補習修身書 巻三』(文学社, 1905・明治38年)の「社会に於ける心得」の「十九、博愛」では、「人は、また、社会公衆に対して慈善・救済の道を行ふが如く、人類に対しても、博愛ならざるべからず。博愛とは、慈善を社会公衆にかけたが如く、人類一般に及ぼすをいふ。」と、「人類」に対する「博愛」の意味を説明している。そして、その後には、

「彼の君国のために弾丸雨注の中に奮戦して、不運にして負傷せる将卒、または、疾病にかゝれる将卒を、敵・味方の区別なく、介抱する赤十字事業の如き、また、外国の飢饉・疾病の流行等に当り、二義主知救済の挙に出づるが如きは、人類相互の道にして、深く博愛の趣旨にかなへる事業なり。人は、また、国土・民族の別なく、同じく人類の一員たると共に、万有の一部分なり。されば、人は、人類に対して、博愛なるべきが如く、更に、万有に対して、博愛の責務を有す。……」

と、「赤十字」などの「博愛」事業の説明、「万有」に関する記述が続いている。

また、同書の「国民としての心得」の編の中にある「二十七、国際」(和親 通商 戦争)に注目してみると、その「戦争」の箇所では、「和親を保ち、通商を盛ならしむるなど、国際の平和は、最も望むべきことなれども、もし、その平和の破るることあらんには、他国に対して、干戈に訴へ、勝敗を決すべきことも、また、止むを得ざるなり。」としており、国際平和は望むべきものだが、それが一旦敗れた場合、戦争の生起は「止むを得ざる」ものととらえら

れている。ここには19世紀以来のいわゆる無差別戦争観が反映されている。そして、それに続いて、

「此の時に当りては、十分、自国の勝利を得べき、各種の手段を用ひて、交戦のことに従ふは、国民の務なり。されど、戦争は、国と国との争にして、決して、人と人との争にあらざれば、戦闘員たりとも、負傷し、或は、兵器を棄て、我に抵抗せざる者は、これを殺害することなく、相当に待遇すべし。ことに、戦闘に従事せざる個人の如きは、よく、その安全を保護すべし。」

としている。ここでは、先の村上『農業補習学校用修身教科書』と同じく、「戦争は、国と国との争にして、決して、人と人との争にあらざる」というルソー流の人道思想を述べつつ、ハーグ平和会議で採択された「陸戦ノ法規慣例ニ関スル規則」にいう「傷病者」「俘虜」に対する取り扱いの内容に相当する趣旨を説いている。

そして、更に続けて、「また、戦時に当り、他国と同盟を結ぶ時は、両国は、互に、攻守のことに当るべく、他国の間の戦争に際し、局外中立を宣言せられたる時は、国民は、厳正に、その中立を守り、決して、違反の行為あるべからず。」と、中立規則の存在とその遵守を強調している。この国際法上の「中立」観念は無差別戦争観の時代における国際法の特質とされており、同書における記述には無差別戦争観がその前提とされていることが明瞭に窺われる。

(3) 横山徳次郎『国定準拠補習修身 乙種』(明治39年)

次に、日露戦後に刊行された、横山徳次郎『国定準拠補習修身 乙種』(寶文館、1906・明治39年)を参照してみよう。同書の「凡例」には、「本書は、小学校補習科、及び実業補習学校規定の精神に基き、其の修身教科書に充つる目的を以て、著述したり。……乙種の目的は、主として、尋常小学校の補習科用とし、」(1頁)とある。また同書では、「本書叙述の体裁は、人物基本主義を採らずして、徳目基本主義に拠りたり。」(2頁)としているように、その目次を見ると、「第十七課 孝行せよ」「第二十六課 兵役納税の義務を尽せ」など、各課の題目には命令形の文末表現(○○せよ)をとる徳目が羅列されている。

その「第二十八課。外国との関係に注意せよ。」(72-74頁)では、先ず冒頭で、「今日は、世界の各国、対峙の時なり。昔の如く、鎖港封建の世に、あらず。一国の行動は、悉く、他国の、注目するところなり。一個人の行為も、時に、国際上の問題を、ひき起すことあり。」と列国「対峙」の時代状況を述べ、「かかる世に、生まれ、我が国を、ますます、発達・進歩せしめて、我が祖先を、はづかしめず、完美なる国家を、子孫に、伝へんには、よろしく、常に、外国との関係に、注意せざるべからず。」と国民としての「個人」の行動について注意を促している(72-73頁)。次いで、「人は、己れの一身を、全うすると共に、また、国家の一人として、国家の安危を、憂へざるべからず。国家は、他の国家と、相対峙すること、すでに、述ぶるが、如くなれば、苟も、国家の体面を、汚し、他の国民に、対して、恥づが如き行、あるべからず。」とし、続いて外国人に対する「親切」「丁寧」なるべきとする心得を述べている(73-74頁)。ここでは、「今日は、世界の各国、対峙の時なり」という国際関係観が示されつつ、「国家の体面」を汚す行為を戒め、「国家の一人」として持つべき「心得」を説くなど、専ら国家の一員としての自覚を国家主義的な観点から説論していることがわかる。

続く「第二十九課。義勇公に奉ぜよ。」(74-77頁)では、冒頭、次のように述べる。

「世界に、国、多しといへども、我が国ほど、よき国体を、有するは、たぐひ、稀なるべし。神武天皇以来二千五百有余年の久しき、万世一系の皇統を、いただき奉り、君は、至仁至武に、ましまし、億兆を、あはれみ、みちびかせたまひ、臣は、武勇忠直にして、事あらば、草むす屍、事あらば、みづく屍と、大君に、つかへ奉り。……かかる国家に、生れたる臣民の幸福、いかばかりぞや。」(74-75頁) これに続いて、日露戦時の「忠勇義奮」について、次のように説く。

「日清の戦争に、よいて、我が国民の武勇、世の、認むるところとなり。北清の事件に、あたりては、世界の強国と、伍して、遜色なく、露国と、戦を、交ふるに、及びては、我が国民の義勇、大に、世界の人心を驚嘆せしめたり。

ああ、この忠勇義奮、国あるを、知りて、身あるを、忘れ、大君のためには、屍を、戦場に、さらして、なほ、榮ありとする、国民の特性は、そも、いづれの、ところより、来りしぞ。この特性、あるがために、我が国は、いまだ、かつて、他国の侮を、受けず、金匱無欠の国体を、保ち、進みて、世界最大強国の列に、入れり。ああ、楽しきことならずや。」(75-76頁)

このように、日清戦時の「武勇」の意義と、「忠勇義奮」という「国民の特性」を称え、「世界最大強国の列に入」ったことを「楽しきこと」と称賛する言辞を述べた上で、更に次のように説いている。

「諸子よ、一旦、緩急あらば、命を、鴻毛よりも、軽しとし、義を、山岳よりも、重しと、心得、進みて、義勇、公に、奉ぜよ、諸子、もし、軍人たらざれば、いはゆる、挙国一致の精神を、固くし、各、その職業に、はげみて、奉公の誠を、いたせ。

挙国一致、忠勇義奮、以て、この金匱無欠の帝国を、万世に、伝へ、皇祚の万歳を、祝し奉り、国民の安泰を、願はざるべからず。この心なきは、日本人に、あらざるなり。この志あらざるは、国民の心得を、知らざるものと、いふべし。」(76-77頁)

かくして、同課の末尾では、「国民の心得」として、一旦事あらば「草生す屍」「みづく屍」となり「大君」に仕えるべきこと、挙国一致、忠勇義奮の「志」を持ち「奉公」の「誠」を致すことを命じている。

(4) 横山徳次郎『国定準拠補習修身 甲種』(明治39年)

同じく横山徳次郎の、『国定準拠補習修身 甲種』(寶文館、1906・明治39年)は、上に挙げた教科書の高等版である。同書には「第二十課。博愛。」があるが、そこには戦時国際法や人道、赤十字社等に関する記述はない。

一方、同書の「第二十二課。共同一致。」では、「一本の箭は、よく、折ることを得るも、もし、数本の箭を一束とせんか、容易に、折り得ざるべし。人の共同一致をなすも、また、然り。すべての事、団体を貫ぶ今日の如き世にありては、殊に、共同一致の必要多しとす。」(62頁)と、「共同一致」の「必要」を説明し、それに続けて次のように述べている。

「日露の戦争は、つひに、我が国の勝利に期せり。我が陸海軍は、勇猛にして、向ふところ、殆んど、捷たざるはなかりき。然れども、その捷ちしは、ただに、軍人のみ、勇猛なりしがゆゑにあらず。国内の人民、悉く、共同一致したるがゆゑなりき。軍人は、外に在りて、戦をつとめ、農・工・商估は、内にありて、その職業をはげみ、官吏は、よく、その任を為したるがゆゑに、財政全きを得、戦争、また、勝利に帰したりき。

昔は、戦をなすにも、一騎撃にて、一人抜けがけの功名を賞したりき。されど、今日は、共同にて進み、共同にて退き、すべて、国体をなしての動作、多きがゆゑに、昔日の如き一人抜けがけの功名は、かへつて、賞せられざるなり。」(62-63頁)

日露戦争勝利の理由の一つに「国内の人民、悉く、共同一致した」ことがあったことを指摘し、戦時における「共同」や「国体をなしての動作」の意義を強調している。

そして、続いて「事を成すには、衆と共にし、力をあはせ、心を同じうし、以て、その成功の全きを、期せざるべからず。共同一致は、実に、今日に於ける必要の心がけといふべし。」(64頁)と同課を結んでいる。

2. 明治末期の勅語読本における記述

次に、明治末期頃から刊行されるようになっていた勅語読本の記述内容を検討してみよう。

(1) 寶文館編輯所『新撰教育勅語読本』(明治41年)

寶文館編輯所編纂『新撰教育勅語読本』(寶文館、1908・明治41年)の序言には、「本書は尋常小学(六学年)、卒業程度以上の者の家庭に於ける自習読本、又は小学校補習科に於ける教科書として修身・国語の二科に、兼用せられ得べし。」とある。

同書には「第五課 戦争」(19-23頁)があり、その小見出しには、「(剣戟相摩し 石壁連立 惨事 干戈 個人間の争 国際間の紛議 仲裁調停 列国対峙 事変 粉骨碎身 英魂 鴻毛泰山 忠勇無比)」の内容が見られる。その記述の一部では、次のように述べられている。

「剣戟相摩し、砲烟相見え、忽ちにして、幾多の生霊を失ひ、忽ちにして、石壁連立の市街をも焦土となすもの、これを戦争とす。人生の惨事、まことに、これに過ぎたるはなし。然れども、戦争も時には、避くべからざることあり。

国際談判つひに纏らず、国交一たび破裂して、いづれが正なるか、いづれが邪なるか、その主張の当否を決するにあたりて、これを干戈に訴ふるにあらずむば、如何ともなし難きに際しては、戦争もまた、まことに、やむことを得ざるなり。それ個人間の争は、上に国権のあるありて、その是非曲直をわかつと雖も、国際間の紛議は、仲裁裁判等の道無き場合には、つひに戦争に達することを覚悟せざるべからず。

殊に、今日の、ごとき、列国対峙の世にありては、その利害の一ならざるところ、その人情風俗の異なるところより、いづれの日、如何なる事あらむも、図り知るべからず、されば、我我臣民は、一旦緩急あるに当りて、義勇公に奉ずるの覚悟なかるべからず。

一旦緩急あるとは、国家に事変あるの時をいふなり。義勇とは、宜しきにかなひ、道理に合ひたる勇氣なり。公に奉ずるとは、国家に尽すの意なり。国家の事変に際しては、粉骨碎身の勞を、辞せざるをいふなり。」(19-22頁)

ここでは、戦争を「人生の惨事」とするも、個人間に上位権力があることと異なり、「国際間の紛議は、仲裁裁判等の道無き場合」に戦争に至ることは「避くべからざることあり」、「やむことを得ざる」ことであると捉えている。また、先の横山の教科書と同じく「列国対峙の世」という国際関係観を述べ、「一旦緩急あるに当りて」の「義勇公に奉ずるの覚悟」を説いている。そして、この後に次のような記述が続く。

「我が民族は、古来一種の英魂を有す。これを大和魂といふ。故に一朝事あるに当りては、命を鴻毛よりも軽んじ、義を泰山よりも重んじ、国のためには、身命を抛ちて、尽すの覚悟を有せり。これ最も、賞すべきところにして、かの日清戦争、または日露戦争に於いて、我が軍隊の忠勇無比なりしは、実にこの大和魂のありしによる。されば諸子もまた常にかくの如き覚悟を有し、一旦緩急あるに当りては、義勇奉公の誠を、致さざるべからず。」(22-23頁)

このように同書では、他の教科書には見られない「大和魂」という用語を出して、「日露戦争」時における「我が民族」の「大和魂」の優秀性を非論理的・妄信的に述べ、「身命を抛ちて、尽すの覚悟」を賞賛を以て説いており、「義勇奉公」の意義の説明が再び繰り返されている。

かくしてこの勅語読本の「戦争」記述は、国際関係のアナーキー性と戦争生起の蓋然性を述べ、教育勅語にある義勇奉公の論旨の中で「身命を抛ちて」「国家に尽す」ことの意義を説くことに収斂するものであったといえる。

また、同書には「第十七課 赤十字社」(惨憺たる光景 救済 淑女 救護 幫助 一視同仁)がある。そこでは先ずナイチンゲールや「ヘンリー・デユナン」を例示して赤十字社の沿革に触れ、西南戦争時の博愛社の創設、「皇室の至仁至慈なる御思召に依」り「明治十九年、始めて万国赤十字条約に加入した」こと等を述べ、次のように続ける。

「赤十字社は、戦争の際、敵身方の^{ミマ}区別なく、皆一様に、博愛の心を以て、死傷者を救護するものなり。又、平時にありては、病院を設けて、看護婦を養成し、その他戦時の救護に必要な準備をなし、以て、一朝事ある時に、備ふるものなり。

明治二十七八年の戦役及び明治三十三年北清事件の際に我が日本赤十字社が、死傷者の救護に務めたることは、著しきものなり、殊に、明治三十七八年戦役の際には、その功勞^{ミマ}少なからざりしを以て、我が 天皇陛下 皇后陛下より、勅語令旨を下して、これを嘉賞したまへり。」(78-79頁)

こうして、日清・日露戦時の赤十字社の活躍の「功勞」を賞賛しているが、更に続いて以下のように述べる。

「博愛とは、広く、他人を愛しあはれむ心をいふなり。人には、博愛の心あるがゆゑに、互に相集り相助けて、安全なる生活を営み得るなり。人にして、若しこの博愛の心無くば、禽獸と等しかるべし。^{ミマ}志かれども、博愛には、順序なかるべからず、まづ父母を愛し、兄弟を愛し、一家を愛し、一村を愛するが如く、その本末順序を正しくせざるべからざるは、もとよりなりと心得べし。」(80-81頁)

前部では一旦は、博愛とは「広く、他人を愛しあはれむ心」であり「この博愛の心無くば、禽獸と等し」としながらも、「博愛には、順序なかるべからず」と留保し、「その本末順序を正しく」認識する心得が必要としている。

もとより、明治中期以降の「国民道徳」は、一方では明治初期以来の日本の「西欧国家体系(Western State System)」への加入という時代的課題の自覚を背景に、国家主義的な観点から「博愛」という「普遍的な倫理的課題」を当為とするものでありつつも、究極的には「特定の国にのみ通用する国民道徳が同時に当為とされ絶対化され」ていたものであった。すなわち、忠孝の家族的忠君道徳と有機体論的愛国主義との結合によって創出された「忠君愛国」の国民道徳規範においては⁽⁹⁾、「愛」には順序があり、「国民道徳によって規制される人間」は「人類

にではなく家族に、世界にではなく祖国に、……そして、その統治者としての天皇に結合する。」
こうして、「自国を先ず愛するところの差別的愛が強調され、他人や他国を等しく愛する博愛は、
無差別の愛、忠君愛国の情を破壊するものとみなされるのであって、横の倫理は、縦の倫理の
中に吸いこまれてしまうのである。」⁽¹⁰⁾明治中期以来、敗戦まで一貫して修身教育を支配する
差別的な国民道徳観念の特質の一端が、ここに明瞭に現れている。

(2)育成会編集部『勅語読本』（明治41年）

育成会編集部の『勅語読本』（育成会、1908・明治41年）は、小山田道太郎や道三郎ら兄弟
の成長物語の記述をとっており、そうした記述体裁の中で徳目を説き、国家に対する心得、忠
誠心を養おうとしている構成となっている。なお、同書ではすべての漢字にルビが振られてい
る。

その「第十四課 小山田道三郎の従軍」には次のような記述がある。

「……時は日清戦争を距ること早十年、我が十万の生霊を犠牲として、羸[か]ち得たる遼東半島は、
貧欲飽くを知らぬ露国の為に横奪せられ、かくて光荣ありし日清戦争の終結も、この大汚点の為に
我が国民を憤怒せしめたり。爾来臥薪嘗胆会稽の恥何時かは雪がんと、我が国民の胸中に秘め置かれし
敵愾心は、明治三十六年に及びて、炎々炬の如く大八洲の端より端にひらめき渡りぬ。当時韓国の事
に関し、露国と交渉のこともありしが、我は成るべく、平和の間に折衝の局を結ばんと欲せしに、露国
の振舞飽くまで傲慢無礼なりしかば、我が皇赫として憤らせ給ひ、翌三十七年二月十日、宣戦の詔勅
發布せられぬ。国民敵愾の気は凝りて、軍備の献納となり、軍事品の寄付となり、出征軍の慰問とな
り、一国挙つて、十年の恨み思ひ知れとの意気猛烈、已に露国を呑むの概あり。」(57-59頁)

このように、遼東半島が「貧欲飽くを知らぬ露国の為に横奪せられ」て「我が国民を憤怒」
させ、「臥薪嘗胆」の「敵愾心」が「炎々炬の如く大八洲の端より端にひらめき渡」りつたとい
う描写、そして開戦に至った理由が「露国の振舞飽くまで傲慢無礼なりしかば、我が皇赫と
して憤らせ給ひ」て、と述べられているところには、ショーヴィニズムに充ちた一面的な戦
争記述という性格が強く見られる。そして、「国民敵愾の気は凝りて」「一国挙つて」とあるよ
うに、日露戦時における国民の一体性を示し、日本の同戦争における正当性と国民の優秀性が、
敵愾心の高揚を狙う文章の中で昂揚を以て説かれていた。

同課の最後部、「義勇公に奉ず」は次のような記述で結ばれている。

「道三郎は逸疾くも出征して、至る処に偉勲を樹て、戦地にて軍曹に昇級し、奉天戦争には正面攻撃
の軍に加はり、奮戦力闘衆を驚かし、遂に大腿骨に銃丸を蒙りて後送せられ、広島予備病院にあ
つて平癒を待ちしが、間もなく、露国との平和成りて、故郷に帰り楽しき家庭に加はり、兄弟諸共に
博愛を旨とし、隣人に慈善を施すを無上の楽みとせられたり。道三郎は後、論功行賞に会ひ、勲功に
より功六級に叙せられたりとぞ。」(59-60頁)

こうして同課は、義勇奉公という文脈に沿って、一人の人物、道三郎の従軍とその功績を称
える論旨に貫かれている。

(3) 小山左文二『戊申聖諭読本』(明治42年)

日露戦争後、1908(明治41)年10月13日に、戊申詔書が發布された。この戊申詔書は、日露戦争勝利による日本の極東における地位向上という認識から、一等国としての「国運発展」を期するため「忠実」「勤儉」を教示し、「我カ光輝アル国史ノ成跡」たる国民道德の振興を強調するものであり、またそれは、教育勅語を大本とする天皇制公教育体制の補修・補強の一翼をなす、帝国主義国家としての経済発展に見合う新しい道德基準を示したものであった⁽¹⁾。戊申詔書が發布されて以降、内容解説を行う読本が現れるようになり、修身科教科書や勅語読本の中においても、「朕ハ爰ニ益々国交ヲ修メ友義ヲ悖シ列国ト与ニ永ク其ノ慶ニ頼ラムコトヲ期ス」の解説箇所、国際関係を説明する記述が見られるようになる。

例えば小山左文二『戊申聖諭読本』(松邑三松堂、1909・明治42年)の「第四節 聖諭第二」には、「朕ハ爰ニ益々国交ヲ修メ友義ヲ悖シ……」の一節についての次のような解説がある。

「謹んで按ずるに、此の一節は、前節の意を受け、我が帝国並に帝国臣民の執るべき公明正大なる外交の方針を昭らせ給へるものと拝察し奉る。

今や我が帝国と列国との交際は実に円満善美をきはめ、世界の最大強国たる英国と攻守同盟を約して膠漆の交を結べるを始めとし、仏露米等の諸国と特別協商を結び、なほ世界のあらゆる文明国と平和条約を交換し、互に大使又は公使を駐割せしめて、国際上の礼を尽せり。されども、陛下にはなほ現状に御満足あらせ給はで、愈外邦との輯睦を厚くせんことを望ませたまふ。……嗚呼中外の臣民孰れか欽仰感佩せざらんや。」(23-24頁)

こうして、「聖諭」の解説として、それが「我が帝国並に帝国臣民の執るべき公明正大なる外交の方針を昭らせ給へるもの」とであるとして、列国交際の「円満善美」たること、「世界のあらゆる文明国」との親交を述べている。ここには日露戦後の一等国意識の高潮が現れている。なお、この引用部の直後には、「今、我が帝国と世界各国との親交輯睦に関し、小村外務大臣が本年の帝国議会に臨みて演述せし大要を左に録せん。」(24頁)として、その長文を載せている(25-29頁)。

3. 大正初期の実業補習学校修身科教科書における記述

続いて、大正初期に刊行されていた実業補習学校修身科教科書における戦時国際法記述を検討してみよう。

(1) 吉田静致『大正教育補習修身書 郡村篇 初程度』(大正2年)

東京高等師範学校教授・吉田静致の『大正教育補習修身書 郡村篇 高程度』(東京寶文館、1913・大正2年)の「例言」には、「本書は、教育に関する勅語の御趣意に基づき、……郡村に於ける小学校補習科・実業補習学校及び青年夜学会等の修身科用教科書に充てんがため編纂したるものなり。」(1頁)とある。また「本書は前篇・後篇の二篇に分つ。前篇は第一学年に、後篇は第二学年に配当するものとす。」としている。その前篇には「第九課 兵役と納税」があり、そこでは「軍備の必要」等について述べられている。

他方、同書の「後編」(第二学年配当)には、「第八課 惻隱の心」(立羽不角 不角 丁稚を憐む 惻隱の心 博愛 博愛の次第 博愛の方法 生物を憐め)がある。この内の「博愛」

の箇所においては、「惻隱の心に基づき、広く世の不幸なる人々を憫み助くるは博愛なり。和氣廣虫が、見ず知らずの孤児を多く養育し、ナイチンゲールが、遠くクリミヤに至りて傷病兵の看護に尽したるが如きは、我等の既に学べるところにして、永く後世の模範とせらる。」(71頁)とするも、次の「博愛の次第」の箇所ではこう続けてる。

「博愛をなすには自ら次第あり、必ず近きより始めて之を遠きに及し、親しきを先にして疎きを後にする等、よく其の先後・厚薄を誤らざるべし。我が親戚・朋友・知人を顧みずして他人に厚くし、我が同胞を救はずして他国民に急なるが如きは、未だ其の宜しきを得たるものにあらず。皇太后陛下の御歌に宣はく、

よろづ民すくはん道もちかきより

おしおよばさん遠きさかひに

」(71-72頁)

先に確認した、寶文館編輯所『新撰教育勸語読本』(明治41年)の記述論理と同じく、「博愛をなすには自ら次第あり」ことを述べ、「御歌」を引きつつ「我が同胞を救はずして他国民に急なる」ことは「宜しきを得たるもの」ではないと説いている。

同じく同書の「第九課 戊申詔書」(… 詔書第二段 庶政の更張 上下の協力 …)の一部には、「詔書第二段」の説明として次のような記述がある。

「抑々明治三十七八年戦役は、我が国危急興廃の依りてかかれる空前の大戦役なりき。而して上下一致協力せるため連戦連捷し、大いに国威を発揚したりと雖も、其の間に受けたる損失も大なれば、恢復は容易のことにあらず。しかのみならず、国威の発揚と共に世界の一等国となり、列国と協力して広く宇内の文明・平和を増進すべき光榮を担へり。内には戦役の創痍未だ治せざるに、外には国家の責任益々重きを加ふ。庶政の改善拡張を要すること、特に多言するまでも無かるべし。之が為には、上下同心協力して忠実其の業に服し、以て奉公の実をあげざるべからず。民億兆の心を以てせば、如何にして国運の隆昌を望み得べき。」(76-77頁)

ここでは、「大戦役」日露戦争「の間に受けたる損失」を述べつつも、「国威の発揚と共に世界の一等国となり」「光榮を担」うまでに国際的地位が向上したことを説明しており、「上下同心協力」「民億兆の心」による「国運の隆昌」を奨励している。ここには、「一等国」たる大日本国という意識傾向とともに、日露戦後の時代状況、すなわち国家への不審と懷疑離反、社会主義政党的結成とその即日禁止、国家主義と個人主義の相克などの諸相が、少なからず反映されていることが見て取れる。

(2) 吉田静致『大正教育補習修身書 高程度』(大正2年)

同じく吉田の『大正教育補習修身書 高程度』(東京寶文館、1913・大正2年)は、先の『初程度』とは「別に高程度のもの即ち高等小学校(修業年限二箇年)卒業の生徒を收容する学校及び夜学会等の教科用書として一卷を編し」(1-2頁)たものである。

同書の中にある「第九課 国交」は、「世界一家 外国人との交際 言語・挙動を慎め 外国文化の輸入 戦争 人道と聖旨」という小見出しからなっている。

先ずその「世界一家」の箇所では、「人智の進歩と伴ひ、交通機関は日々に発達し、世界の距離は次第に短縮せられ、今や列国の関係は益々親密を加へ、利害を同じうし、相互の接近は

愈々其の度を増し来たり。渾円球上化して一家の觀を呈するに至るも蓋し遠きにあらざるべし。」と、「列国の關係」の「親密」化を表現している¹²⁾。

次いで、その「戦争」の小見出しの箇所では、

「宇内の列国は未だ旧來の陋習を脱せず、或は人種・宗教の異同にかかはり、或は己が國利・民福を先とするがため、動もすれば利害・感情の衝突を來し、互に相反目するを免れず。其の極、此に戦争の慘禍を生ずることあり。されど戦争は、國家間の戰にして個人間の争にあらず。故に、交戦國に対して敵愾心を起すは當然なれど、戦闘に直接關係無きものは互に殺傷すべきにあらず。捕虜と雖も虐待せざるは國際の通義なり。既に赤十字同盟は、交戦國の傷病者を救護しつつあるにあらざるや。人道は、戦争の際と雖もこれを尊重すべきなり。」

と、「利害・感情の衝突」や戦争生起の蓋然性を述べつつも、戦時の「國際の通義」、戦時における「人道」について述べている。

だが、その直後に続く「人道と聖旨」の箇所では、「……今上天皇陛下もまた、常に世界の平和、人道の大義に大御心を寄せさせ給ふ。我等よく是等の聖旨を奉体せば、世界の各國、宇内の同胞に対する道を誤らざるべし。」と、「宇内の同胞に対する道」を聖旨の奉体と関連付けて説明している。

ここにはその締め括りにおいて、捕虜虐待禁止は人道であるという記述の直後に「聖旨」（戊申詔書）を置く記述構成が見られる。あくまでも忠君愛國精神涵養の論理がそこに貫かれていたことが見て取れる。このように、「人道」が教育勅語の「博愛衆に及し」の論理と結び付けられる場合もあったことは特徴的である。

(3) 定金右源二『実業修身綱要』（大正2年）

定金右源二『実業修身綱要』（勸学社、1913・大正2年）の前書きには、「本書は主として、工業学校、商業学校、徒弟学校、実業補習学校等の修身教科用書として編纂したるもの……」とあり、同書が実業諸学校とあわせて実業補習学校の教科書としても使用されるべきことを記している。その点もあり、同書の記述内容は、同時期の他の実業補習学校用あるいは夜学用の修身教科書よりも内容の程度が高度なものとなっており、記述表現もやや難度が高くなっている。

同書には「第六章 世界人類間の道德」という章がある。この章は「第一節 國際道德」（政治上の關係 國民的外交 經濟上の關係）、「第二節 人道」（人道 人道の由來 人道を為す方法 人格の完成）の2節からなっている。

先ず、同書第一節の「政治上の關係」の箇所では、「政治上に於て獨立せる國家は互に國權を擴張せんとし、絶えず激烈なる競争をなしつつありと雖も、而かも互に其獨立と權利とを尊重し、互に門戸を開放して通商其他諸種の條約を訂結し、各々公使を派遣して其國を代表せしめ以て和親を図ること、亦昔日の交戰的關係の跡なきが如し。」（130頁）と、諸國家間關係の相互尊重と「和親」が時代潮流であることを述べている。

次いで、「國民的外交」の箇所においては、以下のように述べられている。

「世界の平和を維持し、國交を厚くするは、人類の理想なれども、獨立せる國家は互に其面目を維持し、且つ可成其權威を擴張し、國民の幸福を増進せんと欲するが故に、勢其間に利害の衝突、權利の

確執を生ずるは亦止むを得ざるとなりとす。今や万国平和会議は屢々開催せられ、仲裁裁判所の設定となり、平和的解決の道着々進歩しつつありと雖も、各国独立の主権を有し、其上に之を支配し、命令する権あるを許さざるが故に、未だ実力即兵力の競争を防止するに足らず。各国は軍備の拡張に汲々として、漸く武装の平和を維持せる状態にあり。固より平和は重んずべし、然れども他国にして若し我国の体面を汚し、国権を侵害せんとする挙に出づることあらば、我等は護国の剣を掲げて起たざるべからざるや論なし。是れ軍備の一日も弛うすべからざる所以なり。而して不幸にして仮令干戈の相見ゆるに至るとも、人格的戦時道徳を厳守するの必要なるは之亦論を俟たざるところなりとす。」(134-135頁)

ここでは、「固より平和は重んずべし」としつつも、「勢其間に利害の衝突、権利の確執を生ずるは亦止むを得」という考えを述べた上で、国際関係における上位権力の不在や「武装の平和」の現状を述べ、「若し我国の体面を汚し、国権を侵害せんとする挙に出づることあらば、我等は護国の剣を掲げて起たざるべからざるや論なし」として、「軍備の一日も弛うすべからざる」ことの理由と必要性を強調し、戦争の際には「人格的戦時道徳を厳守するの必要」があることを述べている。

このように、「国民的外交」という内容項目の記述の中に国防・軍備に関する内容が入っていたことは特徴的である。

また加えて、その「経済上の関係」の箇所では、各国は「互に商権の拡張に腐心し、努力しつつあり。」(135頁)として実業人としての心得を説く一方、その記述の中では、「実業に従事せんとするものは世界の大勢を察し、遠大なる志望を持して、平和的競争に勝利を博せんことを期せざるべからず。……外国人との競争も国内の競争と等しく、君子的ならざるべからざるは勿論なれども、外国に対するには特に内国同業者の結束を固くするを要す。蝸牛角上の小争に汲々として、却つて大敵を逸するが如きは海外に発展する所以にあらざるなり。」(136-137頁)と対外競争への備えを述べている。

ちなみに、同書の別の章「兵役の義務」においては、その「兵役の義務」に関して、「今や宇内の列国互に激烈なる競争をなし、以て国威の振張を企図しつつあり。世界の平和は人類の理想なれども、国際的道徳は未だ戦争を終息せしむるに足らざるのみならず、経済的競争の裡面にも必ず実力を伴はざるべからず、即ち兵力の強弱は直に一国の盛衰に関する状態にあり。是れ列国軍備の拡張及び充実に汲々たる所以なり。」と、武断的な認識を示しながら「国際道徳」観念の未熟さ・未発達性を指摘し、「我等此間に処して光栄ある一等国の名誉を維持し、益々国威を振張せんとするもの、豈一日も国防を忽にすべけんや。」と、一等国としての国威伸張のための国防の意義を説いている(126頁)。

4. 実業補習学校修身科教科書・勅語読本における戦争・博愛等に関する記述内容の特質

かくして、明治後期～大正初期、実業補習学校修身科用として発行されていた修身科教科書、及び勅語読本の一部では、「博愛」や「戦争」などの内容項目が置かれ、戦時における赤十字社の事業やその博愛精神の意義、戦時国際法の人道性を説明する一方、「列国対峙」という国際関係観、戦争生起の蓋然性、日露戦時における敵愾心の高揚と日本の正当性、博愛には「先後・厚薄」や「順序」があること、義勇奉公の絶対性と国運隆盛に力を致すべきとする心得を

説いていた。そしてそこには、日露戦後の「軽佻浮薄」の意識傾向の引締を担う性格とともに、戦後の「一等国」意識を強調する性格が如実に現れていた。

また特に、その実業補習学校修身科教科書ばかりでなく、戊申詔書宣布の後から刊行されるようになった勅語読本では、教育勅語や戊申詔書の文脈から忠君愛国の国民道徳を説き、自己犠牲的な「義勇奉公」の重要性、国家への忠誠と服従を説くものが大部を占め、その記述内容の全体的傾向は立憲国民育成の公民読本とは対照的であり⁽¹³⁾、むしろ言わば「官製」の国定修身書や中学校修身科教科書に通ずる論旨がそこに通底していたといえよう。そしてそこでは、皇后の赤十字事業への貢献と博愛の国家性・「同胞主義」性、日清・日露戦争における日本の正当性と優越性、国運発展とそれに対する心得を一方的にジョーヴィニズムを以て説いており、修身教育の枠組にある忠君愛国心涵養をその内容論理の基底とするものであった。

戦時国際法・博愛に関する記述に関していえば、総じて同時期の公民読本の記述よりもやや簡潔なものであり、比較的記述スペースは少なく微々たるものであったといえる⁽¹⁴⁾。そしてそこには、ほぼ同時期の立憲国民育成を意図した公民読本にあったような、「外交」や「条約」、「国際法」の性質などに関する詳細な記述内容は、ほとんどの教科書には位置付けられていなかった。なお、勅語読本には国際法や赤十字社に関する記述は僅か一つの教科書にしか存在しなかった点も指摘される。

また、大正初期の修身科教科書の内容は比較的高度なものであり、外交や国際法についての一定の記述もあり、中学校修身科教科書に準じたものとして作成されていたものであったと推測される⁽¹⁵⁾。実業補習学校用修身科教科書の執筆者のうち、中学校修身科教科書を執筆していたのは、管見の限りでは吉田静致のみである。すなわちこれは、実業補習学校用として執筆された修身科教科書の大多数は、中学校の修身科教科書とは、その内容記述上の趣旨が自ずと異なるものとなっていたことを示すものである。ただし何れにせよ、全体的に見れば、その記述内容の各教科書ごとの多様性という側面については、同時期の「公民読本」に通ずるものがある。

おわりに

実業補習学校は1890（明治23）年に法令上の設置が規定されて以降、大正期に入り全国各地で設立されたが、「公民科」が1922（大正11）年にこの実業補習学校に設置されるに至る以前、日露戦後の明治末期より、外交や戦時国際法、人道や博愛、日清・日露戦争における日本の正当性、日露戦後の国民としての心得などに関する知識・態度などが、公民読本のみならず、その実業補習学校用修身科教科書、勅語読本の一部に盛り込まれ、実際にそれらが教えられようとされていたことが確認された。日露戦争前後、第一次世界大戦の以前の時代において、義務教育課程修了前後の、農山漁村の青少年に育成すべきと考えられていた国際法・博愛認識、戦争認識等の、言わば忠君愛国主義的な性格の一端が、この時期のこれら実業補習学校用修身科教科書や勅語読本の記述内容から窺われよう。

そして、明治後期の検定期小学校修身科教科書、国定小学修身書⁽¹⁶⁾、検定下の中学校倫理科・修身科・法制及経済科の教科書など、「官製」の教科書とは異なり、その記述内容に制約が課されることのなかった実業補習学校修身科教科書などでは、それが故に、それぞれの著者の外交・国際法認識、日清・日露戦争認識が直裁に表れており、各教科書・読本ごとに多様な記述

内容があった点にも着目したい。

以後、更に未見の教科書・読本の渉獵にあたりつつ、大正期におけるそれらの記述の変容についても検討を進めていきたい。

注

- (1) 宮坂広作「公民教育の思想と現実」(宮原誠一編著『日本現代史大系 教育史』東洋経済新報社, 1963年, 所収), 宮坂広作『近代日本社会教育政策史』国土社, 1966年, 131-134頁および210-215頁, 宮地正人『日露戦後政治史の研究——帝国主義形成期の都市と農村——』東京大学出版会, 1973年, 山岸治男「明治後期農村における実業補習学校——宮城県の場合——」(日本教育社会学会『教育社会学研究』第32集, 1977年), 花井信『近代日本地域教育の展開——学校と民衆の地域史——』梓出版社, 1986年, 参照。
- (2) 村田宇一郎『学校中心自治民育要義』寶文館, 1910(明治43)年。なお, 同書の記録の中では, 国際法や戦争, 人道に関する教授内容が取り扱われている実践場面は見うけられない。ただし, 同書の「第二章 我邦方今の趨勢」の冒頭には「一 国と国との関係」という節がある(12-16頁)。そこでは, 「目今地球上には四五十の独立国が存在して居るが, 是等の各国民が今日以来永久にお互いの福利を増進して行かうと思へば, どうしても, 是等の各国民が協同一致して行かなければならぬ。」との書き出しに始まり, 続いて, 諸国民の「協同一致」と「国際協同主義」, 外交上の「共存主義」の持つ意味を述べている。その後で, 「ところが, 此の世界列国の仲間入をして, 利益交換をして行く為めには, 先づ自分が自分で発達すると云ふことが必要である。……つまり実力の必要と云ふことが起つて来る。」と述べ, 以後同書では「町村の自治」の改善, 「一家の経営」の指導のあり方について書き進めている。なお, 村田宇一郎らの明治後期の「自治民育」についての論及や分析・考察は, 宮坂, 前掲論文, 及び宮坂, 前掲書(131-134頁および210-215頁), 高山次嘉「公民教育の源流」(『北海道教育大学紀要(第1部C)』第20巻第2号, 1970年)22頁, 斉藤利彦「地方改良運動と公民教育の成立」(『東京大学教育学部紀要』第22巻, 1982年)176-179頁, 笠間賢二「地方改良運動と小学校(I)」(『宮城教育大学紀要』第29巻第2分冊, 1994年)249-256頁, 参照。
- (3) 拙稿「明治後期の公民読本における『外交』『戦争』に関する記述内容の検討」(『岩手大学教育学部研究年報』第62巻, 2003年)。
- (4) 戦前期日本の修身教育, 公民教育に関する先行諸研究には, 大正末期実業補習学校における修身科の性格, 及びその教授内容に関する研究は, 公民科設置に関連して簡潔に触れられているもの以外, 皆無に等しい状況である。例えば, 文部省実業補習教育主事・岡篤郎は, 実業補習学校前期「修身」の教程「道徳の要旨」(前期)は, この実業補習学校標準学科課程にいう教程「公民心得」(後期)とともに「公民教育」の中核をなすものと考えていた(岡篤郎『実業補習公民教育の研究』269-294頁)。こうした, 実業補習学校での「公民教育」における前期「修身」(「道徳の要旨」)と後期「修身」(「公民心得」)の関連, 及びそれら教授内容の位置付けをめぐる議論についての詳細な検討が今後必要とされるといえる。
- (5) 無論, ここで, 未だ存在が確認されていない, 未見の教科書・読本が相当数あるであろうということは念頭に置いておかなければならない。
- (6) ただし, その教科書として出版されていたものに関しては検定はなく, これらの修身科用教科書・読本が実際にどの程度使用され, 外交, 戦時国際法の内容が実際に教えられていたのか否かについては, それらの採択・使用状況が不明であり定かではない。しかし, その教えるべきとされていた意図とその内容上の性格については, 少なくともその記述の在り様から確認することは出来

ると考えられる。こうした意味から、本稿では、その教科書や読本の表題名及びその「前書き」や序文などの記述から推察する限りで、実業補習学校修身科用の教科書・読本として出版されたものと判断されるもののみを取り扱うことにする。なお、各書の書誌、及びそれらの修身科教科書・読本としての位置付けについては、鳥居美和子編『明治以降教科書総合目録Ⅰ 小学校篇』（教育文献総合目録 / 国立教育研究所編、第3集第1）小宮山書店、1967年、及び、鳥居美和子編『明治以降教科書総合目録Ⅱ 中等学校篇』（教育文献総合目録 / 国立教育研究所編、第3集第2）小宮山書店、1967年、等を参考にした。

- (7) 「戦争法における人道主義の導入は、戦闘員と非戦闘員を分離することをもって重要な発展をとげた」と評価される。これには18世紀の啓蒙思想家の功績が大きいとされ、特にルソー (J.J. Rousseau) の役割が評価されている。(筒井若水『現代国際法論——国際法における第三状態——』東京大学出版会、1972年、162頁)。ルソーの『社会契約論』には次の一節がある。「戦争は人と人との関係でなくて、国家と国家の関係なのであり、そこにおいて個人は、人間としてではなく、市民としてでさえなく、ただ兵士として偶然にも敵となるのだ……。要するに、それぞれの国家が敵とすることができるのは、ほかの諸国家だけであって、人々を敵とすることはできない。」(ルソー (著)、桑原武夫・前川貞次郎 (訳)『社会契約論』岩波書店、1954年、24頁)
- (8) なお、アンリ・デュナンの詳細については、吹浦忠正『赤十字とアンリ・デュナン——戦争とヒューマニティの相剋——』中央公論社、1991年、三浦勉『赤十字の人道原則とその法的意味』（『重細亜法学』第33巻第2号、1998年）、参照。なお、吹浦忠正『捕虜の文明史』新潮社、1990年、参照。
- (9) 石田雄『明治政治思想史研究』未来社、1954年、3-104頁。
- (10) 武田清子『人類愛と国民道徳』（『講座 現代倫理 第9巻 世界と日本の道徳教育』筑摩書房、1958年、所収）41-42頁。
- (11) 宮地、前掲書、3-34頁、窪田祥宏「戊申詔書の発布と奉体」（日本大学教育学会『教育学雑誌』第23号、1989年）参照。
- (12) なお、ここには、同書以前の明治末年に吉田が著した中学校修身科教科書の、「国交」に関する記述内容構成・内容項目との類似性が確認される。吉田静致『中学教育修身教科書 巻五』（寶文館、1911・明治44年）には、「第十一課 国交其一」（世界一家 各国の関係 和親と正義 言動の慎重 通商 信義）、「第十二課 国交其二」（締盟国 武装的平和 戦争 戦争と人道 赤十字社事業 局外中立 攻守同盟 平和は現時の大勢 平和と聖意）という内容構成が見られる。その「世界一家」の箇所には「渾円球上化して一家の觀を呈するに至るも蓋し遠きにあらざるべし。」という同様の記述も見られ、この明治末年の吉田自身の中学校修身教科書記述の表現を踏襲あるいは再掲していることがわかる。
- (13) 拙稿「竹越與三郎『人民讀本』における『外交』記述と『戦争』観」（日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.89、2003年）を参照されたい。
- (14) あわせて、前掲拙稿「明治後期の公民讀本における『外交』『戦争』に関する記述内容の検討」を参照されたい。
- (15) 明治後期の中学校修身科教科書の記述内容については、拙稿「明治期の修身教育における国際法・国際道徳に関する内容の検討——中学校修身科『国際』『人類ニ対スル義務』の性格——」（早稲田大学教育学部『学術研究（地理学・歴史学・社会科学編）』第48号、2000年）を参照されたい。
- (16) 拙稿「明治末期における小学校国民的教材『外交』『国交』の検討——高等小学讀本・修身書の記述内容と明治後期『国民的教材』論——」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第10号、2000年）を参照されたい。

【附表1】 明治末期の実業補習学校修身科教科書と戦時国際法・博愛等関連項目・記述

発行年	著者・書名・出版社	国際・博愛等の項目	戦時国際法・博愛に関する記述（抄）
1904・明治37	村上辰午郎『農業補習学校用修身教科書各編 下編』実業教科研究組合	「八 博愛」 「―― 外国人」	「戦争は、兵力をもって、敵の兵力を、そぐを目的とし、決して、怨をもって、敵の一人に対するものにあらずば、……」 (記述なし)
1905・明治38	長谷部愛治『実業補習修身書 卷三』文学社	「社会に於ける心得」 「十九、博愛」 「国民としての心得」 「二十七、国際」(和親 通商 戦争)	「彼の君国のために弾丸雨注の中に奮戦して、不運にして負傷せる将卒、または、疾病にかゝれる将卒を、敵・味方の区別なく、介抱する赤十字事業の如き、また、外国の飢饉・疾病の流行等に当り、二義主知救済の挙に出づるが如きは、人類相互の道にして、深く博愛の趣旨にかなへる事業なり。……」 (戦争)：「和親を保ち、通商を盛ならしむるなど、国際の平和は、最も望むべきことなれども、もし、その平和の破ることあらんには、他国に対して、干戈に訴へ、勝敗を決すべきことも、また、止むを得ざるなり……されど、戦争は、国と国との争にして、決して、人と人との争にあらずば、戦闘員たりとも、負傷し、或は、兵器を棄て、我に抵抗せざる者は、これを殺害することなく、相当に待遇すべし。ことに、戦闘に従事せざる個人の如きは、よく、その安全を保護すべし。……」
1906・明治39	横井時敏『補習日本実業教科書 下』修文館	「公民としての心得」 「第十五課 外国人」 「第十六課 対外心と愛国心」	(記述なし) (記述なし)
1906・明治39	横山徳次郎『国定準拠 補習修身 甲種』寶文館	「第二十課。 博愛。」 「第二十二課。 共同一致。」	(記述なし) 「日露の戦争は、つひに、我が国の勝利に期せり。我が陸海軍は、勇猛にして、向ふところ、殆んど、捷たざるはなかりき。然れども、その捷ちしは、ただに、軍人のみ、勇猛なりしがゆゑにあらず。国内の人民、悉く、共同一致したるがゆゑなりき。……」
1906・明治39	横山徳次郎『国定準拠 補習修身 乙種』寶文館	「第二十八課。 外国との関係に注意せよ。」 「第二十六課。 兵役納税の義務を尽せ。」 「第二十九課。 義勇公に奉ぜよ。」	(記述なし) (記述なし) 「日清の戦争に、よりて、我が国民の武勇、世の、認むるところとなり。北清の事件に、あたりては、世界の強国と、伍して、遜色なく、露国と、戦を、交ふるに、及びては、我が国民の義勇、大に、世界の人心を驚嘆せしめたり。ああ、この忠勇義奮、国あるを、知りて、身あるを、忘れ、大君のためには、屍を、戦場に、さらして、なほ、榮ありとする、国民の特性は、そも、いづれの、ところより、来りしぞ。この特性、あるがために、我が国は、いまだ、かつて、他国の侮を、受けず、金匱無欠の国体を、保ち、進みて、世界最大強国の列に、入れり。ああ、楽しきことならずや。」
1906・明治39	横井時敏・松下盤根『補習日本実業修身書 卷下』修文館	「公民としての心得」 「第十五課 外国人」 「第十六課 対外心と愛国心」	(記述なし) (記述なし)

1910・ 明治43	井上哲次郎校閲・補習教育研究会著『補習新修身書 巻二』文学社	「第十三 博愛」(…和氣廣蟲とナイチンゲール) 「第十八 義勇奉公」 「第二十 外国人に対する心得」(条約の改正行為を慎むべし 国威を損ずべからず …)	「……ナイチンゲールが、クリミアの戦争の時、三十四人の婦人をひきゐて、海をわたりて、戦地に向ひ、力を尽して、病兵・負傷兵の救護に従事したりしが如き、いづれも、この博愛の道にかなへる、よき行なり。」 (記述なし) (記述なし)
1911・ 明治44	金港堂編輯部『青年補習修身書』	(関連項目なし)	(記述なし)
1912・ 明治45	土方久元・東久世通楳『国民修身訓』乾、坤 啓成社	(関連項目なし) (*人物を通した徳目)	(記述なし)
1913・ 大正2	吉田静致『大正教育補習修身書 郡村編初程度』東京寶文館	前編：「第九課 兵役と納税」(…二大公務軍備の必要 良兵は多く農村に出づ 軍人の光栄…) 後編：「第八課 惻隱の心」(立羽不角 不角、丁稚を憐む 惻隱の心 博愛 博愛の次第 博愛の方法 生物を憐め) 「第九課 戊申証書」(…詔書第二段 庶政の更張 上下の協力…)	(記述なし) (記述なし)
1913・ 大正2	吉田静致『大正教育補習修身書 高程度』東京寶文館	「第九課 国交」(世界一家 外国人との交際 言語・挙動を慎め 外国文化の輸入 戦争 人道と聖旨)	(戦争)：「字内の列国は未だ旧来の陋習を脱せず、或は人種・宗教の異同にかかはり、或は己が国利・民福を先とするがため、動もすれば利害・感情の衝突を来し、互に相反目するを免れず。其の極、此に戦争の惨禍を生ずることあり。されど戦争は、国家間の戦にして個人間の争にあらず。故に、交戦国に対して敵愾心を起すは当然なれど、戦闘に直接関係無きものは互に殺傷すべきにあらず。捕虜と雖も虐待せざるは国際の通義なり。既に赤十字同盟は、交戦国の傷病者を救護しつつあるにあらざるや。人道は、戦争の際と雖もこれを尊重すべきなり。」 (人道と聖旨)：「……今上天皇陛下もまた、常に世界の平和、人道の大義に大御心を寄せさせ給ふ。我等よく是等の聖旨を奉体せば、世界の各国、字内の同胞に対する道を誤らざるべし。」
1913・ 大正2	定金右源二『実業修身綱要』勸学社、	「第六章 世界人類間の道徳」 「第一節 国際道徳」(政治上の関係 国民的外交 経済上の関係) 「第二節 人道」(人道 人道の由来 人道を為す方法 人格の完成)	(国民的外交)：「世界の平和を維持し、国交を厚くするは、人類の理想なれども、独立せる国家は互に其面目を維持し、且つ可成其權威を拡張し、国民の幸福を増進せんと欲するが故に、勢其間に利害の衝突、權利の確執を生ずるは亦止むを得ざるとなりとす。……固より平和は重んずべし、然れども他国にして若し我国の体面を汚し、國權を侵害せんとする挙に出づることあらば、我等は護国の剣を提げて起たざるべからざるや論なし。是れ軍備の一日も弛うすべからざる所以なり。而して不幸にして仮令干戈の相見ゆるに至るとも、人格的戦時道徳を嚴守するの必要なるは之亦論を俟たざるところなりとす。」 (記述なし)

*上掲の各教科書は国立教育政策研究所教育図書館及び東書文庫に所蔵。

*本表は未定稿。

【附表2】明治末期の勅語読本と戦時国際法・博愛等関連関連・記述

発行年	著者・書名・出版社	項 目	戦時国際法・博愛に関する記述（抄）
1903・ 明治36	文盛堂編輯部『補習家庭 公德読本』柳原文盛堂 (補習科用)	(関連項目なし)	(記述なし)
1905・ 明治38 訂正再 版（初 版明治 37）	普通教育研究会『公德養 成国民新読本』 鍾美堂 (補習科用)	(関連項目なし)	(記述なし)
1907・ 明治40	五車楼編輯部『日本読本』 五車楼	(関連項目なし)	(記述なし)
1908・ 明治41	東久世通禧監修・育成会 編輯部『教育勅語読本 全』育成会	「第十四課 小山田道三郎 の従軍」 (兵役は国民の義務 国権 を重んじ国法に従ふ 上 には敬を尽し下には愛を 尽す 十年の忍耐 国民 の憤怒 義勇公に奉ず 博 愛慈善)	「……時は日清戦争を距ること早十年、我が十 万の生霊を犠牲として、贏[か]ち得たる遼東半島は、貧 欲飽くを知らぬ露国の為に横奪せられ、かくて光榮 ありし日清戦争の終結も、この大汚点の爲め我が国 民を憤怒せしめたり。爾来臥薪嘗胆会稽の恥何時か は雪がんと、我が国民の胸中に秘め置かれし敵愾心 は、明治三十六年に及びて、炎々炬の如く大八洲の 端より端にひらめき渡りぬ。……」
1908・ 明治41	寶文館編輯部所編纂『新撰 教育勅語読本』 (小学校補習科用)	「第五課 戦争」(剣戟相 摩し 石壁連立 惨事 干 戈 個人間の争 国際間の 紛議 仲裁調停 列国対峙 事変 粉骨碎身 英魂 鴻 毛 泰山 忠勇無比) 「第六課 徴兵に出たる人 の親に」(御入営 憂し 余波 御当籤 御秘蔵 打 はへ 磊落 めめしき) 「第十七課 赤十字社」(惨 憐たる光景 救済 淑女 救護 幫助 一視同仁)	「剣戟相摩し、砲烟相見え、忽ちにして、幾多の生 霊を失ひ、忽ちにして、石壁連立の市街をも焦土と なすもの、これを戦争とす。人生の惨事、まことに、 これに過ぎたるはなし。然れども、戦争も時には、 避くべからざることあり。……一旦緩急あるとは、 国家に事変あるの時をいふなり。義勇とは、宜しき にかなひ、道理に合ひたる勇氣なり。公に奉ずるとは、 国家に尽すの意なり。国家の事変に際しては、粉骨 碎身の労を、辞せざるをいふなり。」…… (記述なし) 「明治二十七八年の戦役及び明治三十三年北清事件 の際に我が日本赤十字社が、死傷者の救護に務めた ことは、著しきものなり、殊に、明治三十七八年 戦役の際には、その功勞尠なからざりしを以て、我 が 天皇陛下 皇后陛下より、勅語令旨を下して、 これを嘉賞したまへり。……」 「……志かれども、博愛には、順序なかるべからず、 まづ父母を愛し、兄弟を愛し、一家を愛し、一村を 愛するが如く、その本末順序を正しくせざるべから ざるは、もとよりなりと心得べし。」
1908・ 明治41	寶文館『実用事項補給読 本』寶文館	(関連項目なし)	(記述なし)
1909・ 明治42	土井亀之進編纂『報徳読 本』国民教育社 (実業補習学校用)	「第十五章 博愛」(*「報 徳記」からの引用)	(記述なし)

1909・ 明治42	後藤嘉之『戊申詔書 青年読本』六盟館	「第二章 上下心を一にすること」「第三節 日本海 の海戦」 「第八章 自強息まないこと」「第三節 我が国の軍備」(「矢田鶴之助著実業補習読本」)「第五節 世界に於ける日本の位置」(依田豊)	(記述なし) (記述なし)
1909・ 明治42	小山左文二『戊申聖諭読本』松邑三松堂	「第四節 聖諭第二」	「今や我が帝国と列国との交際は実に円満善美をきはめ、世界の最大強国たる英国と攻守同盟を約して露清の交を結べるを始めとし、仏露米等の諸国と特別協商を結び、なほ世界のあらゆる文明国と平和条約を交換し、互に大使又は公使を駐割せしめて、国際上の礼を尽せり。……」
1910・ 明治43	金港堂『青年報徳読本』(実業補習用)	(関連項目なし)	(記述なし)
1910・ 明治43	国民教育研究会『青年夜学自習読本』(地方青年夜学校国語漢文購読用)	「三 韓国併合ノ詔書 附同条約」 「三四 死して惜まるる人となれ」	(記述なし) (記述なし)
1911・ 明治44	橋本孫一郎『青年夜学報徳読本 上巻』六合館 掛川 報文館	(関連項目なし)	(記述なし)
1911・ 明治44	神戸昌平『補習教育経済教本』興文社 (農業科用)	(関連項目なし)	(記述なし)
1912・ 明治45	日比野寛『青年教科日本臣道読本』金港堂	(関連項目なし) (* 徳国の羅列)	(記述なし)
1912・ 大正1	山海堂書店『国民教育勅語読本』	「第五章 自己と他人 (恭儉・博愛)」	(記述なし)
1912・ 大正1	鳥本与一郎『勅語実践教本』育成会	(関連項目なし)	((記述なし) (* 欧米諸国の「利己主義」への戒め)
1913・ 大正2	国民教育研究会『地方改良農村自治読本』東京出版社	(関連項目なし)	(記述なし)

* 上掲の各書は国立教育政策研究所教育図書館及び東書文庫に所蔵。

* 本表は未定稿。